

氏 名	ふ け たか ひろ 福 家 崇 洋
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 386 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 共 生 文 明 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	戦間期日本社会運動試論

論文調査委員	(主 査) 教 授 道 簀 泰 三	教 授 佐 伯 啓 思	教 授 江 田 憲 治
	教 授 池 田 浩 士		

論 文 内 容 の 要 旨

本博士学位申請論文は、個人と国家のあるべき関係、個人と他者がつくりうる「超国家」(＝脱国家)的な共同体の可能性について考察したものである。この古くて新しい問題に迫るため、本論では、理論的考察はあえて前面に出さず、さまざまな歴史的資料に自ら語らせるという実証的方法がとられる。「大正デモクラシー」期の1910年代初頭から1930年代初めの「ファシズム」勃興期における社会運動、なかでも、これまで歴史記述において軽視されてきた運動家たち(第二章の岡 悌治、第三章の北原龍雄、第四章の老社会、および後篇で扱った国家社会主義者たち)の思想の実態が、資料を通して実証的に暴き出されている。「デモクラシー」と「ファシズム」の断絶を前提とするのではなく、前者のうちにも個人が国家に吸収されてゆく要素を、後者のうちにも「超国家」へと向かう要素を見出し、この両者の連続性、重層性を明るみに出すことによって、そこから個人と他者のあるべき共同性のありようを浮かび上げさせるというのが本論文のスタンスである。

前篇「[種]と[愛国]の鼓動」では、まず、「大正デモクラシー」期に照準を合わすことによって、これまでしばしば対立的に語られてきた「デモクラシー」と「ファシズム」とのあいだに密かな連続性があることが示される。

第一章「[愛国]への普通選挙」、第二章「普通選挙と人種改善」、第三章「北原龍雄と黒龍会」では、雑誌『第三帝国』ならびに『新理想主義』における鈴木正吾、岡 悌治、北原龍雄の思想運動を通して、「大正デモクラシー期」の普通選挙運動のありようが検証され、この普通選挙運動のなかに、第一次世界大戦下での国民動員、人種改善、帝国主義の要素と結びつく側面が潜んでいたことが指摘される。

第四章「老社会の[共同]」では、これまで「日本ファシズム」の源流とされてきた「老社会」に、堺 利彦、高島素之などの社会主義運動家のみならず、労働団体、自由労働者など雑多な思想、年齢、職業の者たちが参加し、他者との新たな共同性が模索されていたことが明らかにされる。このゆるやかな組織体のなかで、個人が国家のうちにありながらも「超国家」的なものへと向かってゆく契機が模索されていたことが指摘されている。

後篇「[ファシズム]波及と「超国家」の可能性」では、「デモクラシー」と「ファシズム」との関係が、今度は逆に「ファシズム」を再検証することによって問い直され、個人が国家や天皇に接合、吸収されないあり方はいかにして可能かという問題について、具体的資料を駆使しつつ考察される。

まず第五章「一九二〇年代初期日本におけるイタリア・ファシズム観の考察」では、1920年初頭以降の日本で「ファシズム」という言葉によって何が表象されてきたか、その変転がつぶさに検証される。そのうえで第六章以下では、「ファシズム」の亜流と目された高島素之、石川準十郎、山内一男たちによる国家社会主義運動のなかで、イタリア・ファシズム、ナチズムがどのように論じられていったか、そこで人間の心理や情感などがどのように捉えられていったか、あるいは、彼らが国家とどのように向き合ったかといった問題に焦点が合わされてゆく。

第六章「一九二〇年代後期における高島素之のイタリア・ファシズム論について」では、国家社会主義運動を率いるなか

で1920年代末に多くのイタリア・ファシズム論を草した高島が、国家という機構がもたらす人間の機械化を問題視し、英雄や神、偶像への崇拜をいかにして排除できるかという問題に取り組んでいたさまが描き出される。

第七章「日本主義運動における「大衆化」とナチズム受容」では、高島亡きあと国家社会主義運動を引き継いだ石川、山内らが、一方ではナチ受容において先駆的な役割を果たしつつも、同時に「国家＝手段」論や国家廃止論に近いことを主張していた事実が明らかにされる。そのうえで、彼らが、日本における「国粹主義」への批判をどのようなかたちで行なったのかが具体的に検証されている。

第八章「一九三〇年代初期日本における国家社会主義運動と「ファシズム」」では、山内が、労働者獲得に失敗したイタリア・ファシズムならびにナチズムを「国家資本主義」として明確に批判するとともに、「国家権力（政治的権力）」の露骨な拡大・強化を警戒して、それに対して抵抗線を築こうとするさまが描き出される。

最終章「国家社会主義・日本主義論争」では、政治、経済的領域のみならず人間の「社会心理」領域をも覆おうとしていた1930年代初頭の国家権力の拡大、強化を背景にして、元高島一派で「日本主義」に移行した小栗慶太郎が、人間の「心理」や「意識」を共同体へと取り込んで、国家を生命体として躍動させようと画策し、「天皇政治の絶対性」を持ち出してくるさまが描かれる。とともに、この小栗の国家観が石川準十郎との論争を引き起こし、石川が、個なくして全体はありえずとして、この小栗の国家観が「国家有機体説」の復活にすぎず、支配権力の御用思想だと批判するさまが対立的に描き出される。この論争のなかで、国家をひとつの「分化独立する公的権力」として人間の心理と明確に切り離し、国家に先行する社会によって育まれる「共同の文化」を重視しようとする石川の思考が、最後に本論全体のテーマを響かせながら、明確に浮かび上がらせられている。

論文審査の結果の要旨

本博士学位申請論文の価値は、以下の三点に集約することができる。

(1) 資料的価値。本論文は、これまで歴史記述において重視されることのなかった思想家ないし社会運動家たちの思考のありようを再度洗い直し、そこで実際にどのような思想的闘いが展開されていたのかを暴き出すことに焦点が合わせられている。そのため、さまざまな資料を発掘し、それらに細かく分け入ってゆくという地道な実証的作業に大きな力が注がれている。

これまでほとんど日の目を見なかった雑誌『第三帝国』や『新理想主義』に新たに照明が当てられ、「大正デモクラシー」期の普通選挙を担った岡 悌治や北原龍雄たちの思想のうちに、個を国家へと吸収してゆくようなのちの「ファシズム」的要素が潜んでいたことが暴き出される。

あるいは、今ではほとんど顧みられることのない「老社会」の資料が可能な限り収集、提示され、一般に「ファシズム」の源流と位置づけられているこの共同体の活動のうちに逆に、国家を超えてゆく共同性のありようが模索されていた事実が明るみに出される。

あるいはまた、高島素之、石川準十郎、山内一男など国家社会主義運動家たちがイタリア・ファシズムないしナチズムをどのように受容していったか、その微妙な変転が、当時のさまざまな新聞、雑誌の記事にもとづいて克明にたどられる。それを通して、「ファシズム」の一翼とみなされてきた1920年代後半の国家社会主義運動の思考のうちに、天皇に依拠しない「超国家」の方向への志向が強くあった事実が指摘される。

随所に遺族への聞き取り調査さえ交えながら膨大な資料を収集、提示し、あくまで資料そのものに語らせようとする、その圧倒的な情熱と真摯な研究態度には、研究者としての非常にすぐれた資質が顕著にうかがえるし、収集された膨大な資料が、それ自体としてきわめて学問的価値の高いものであることは言うまでもない。

(2) 方法論的価値。本論はしかし、たんなる資料の羅列に終始するものではない。(1)でも触れたように、本論の方法は、資料でもっていわば歴史をさかなでするという方法と称してよく、歴史ないし歴史記述のなかで硬直し、レッテルと化してしまった「デモクラシー」「ファシズム」の概念を、細かな資料にもとづいて再度揺れ動かし、いったんレッテルをはがしたうえで再検証するというきわめてユニークな方法論に裏打ちされている。

「デモクラシー」と「ファシズム」の密かな連続性ないし重層性を、資料を通して具体的に浮かび上がらせることによっ

て、重大な問題として提起しえたのは、本論文を貫くこうしたユニークな方法論がもたらした独自の功績であり、それは、これまでの日本ファシズム研究に新たな光を投げかけるとともに、今後この研究分野を新たな方向に向け変えてゆく可能性を秘めていると言っても過言ではない。

(3) 理論的価値。最後に本論文のもつ理論的価値にも言及しておかねばならない。大きく見て、本論文は、絶対的な政治的ないし宗教的な価値によって国家を超えた共同体を招き寄せようとした橋川文三の「超国家」主義に強い触発を受けている。しかし橋川とは逆に、この「超国家」的共同体を絶対的価値にもとづかない他者との共同というかたちでいかにして構築できるかということを、自らの大きな理論的、思想的テーマとして掲げている。本論文は、そうしたテーマ設定から見て、たんなる歴史研究の枠にとどまるものではなく、むしろその狙いは、きわめて射程の大きな理論的研究にあると言わねばならない。

人間の国家への統合による自己喪失を乗り越え、近代国家を越え出るような共同性をいかにして理論的に構築できるかというこの永遠のテーマは、「プロローグ」でも強調されているように、「戦後民主主義」をいかに乗り越えてゆくかというきわめてアクチュアルな問題意識に支えられたものであり、現在のわれわれにとってもけっして避けて通れない問題でもある。なるほど、本論文は、この射程の大きな問題に対する解決において、当然ながらなお十分な域に達しているとは言えず、今後の課題としてなお継続が期待されるところである。とはいえ本論文が、そうした重要な問題に切り込んでゆくためのひとつの理論的拠点を築こうとしている、ないし築きはじめている点は、思想研究者のまっとうな姿勢として大いに評価できるところである。

以上を総合して、本論文は人間・環境学研究科の博士論文として価値あるものと判断される。平成19年12月7日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。